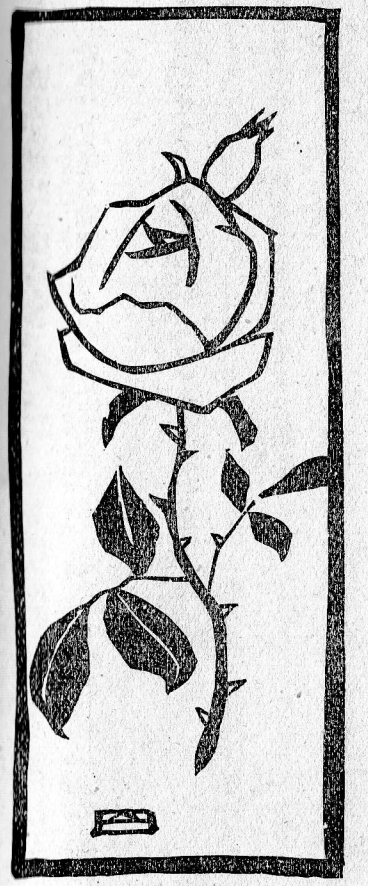
醫者は顔を背向けた。私は其手を取つた。

『まア何か他の話を致しませう、でなければ些少の賭で歌留多でも取らうぢやありませんか？こんな高尚な感情に耽けるのは私のやうな者には向かないので、まア只一つ如何したら子供が泣かないやうになるだらう。女房が口小言を云はない樣になるだらう位の事をあくせく考てれア澤山なのです。其後まア正式結婚てな事をやりましたがな……何に……商人の娘でしてね――持參金七千留と云ふんてす、名はアクリナと申しましてね、どうやらツリホン殿と琴瑟和合の爲體ですが隨分口喧ましい女でしてねまア〳〵それでも幸と一日寢てばかり居るので大助りてさ……ぢや歌留多をやりますかな！』

で私共は二錢賭の歌留多をやつた、ツリホン、イワニッチは二留半儲けたので大滿足して夜更に歸り去つた。

（完）



ひと夜

水野仙子

晝のうち、よく〳〵ほんの一寸の間、例になうとく〳〵と靜になつた枕許をはなれて、お末は長火鉢の前ににぢり寄つた。そこには立て膝の勇吉が、煙管を指にはさんだまゝ、店の方を向いて先刻からぼんやりして居た。

「ね、貴君」

常からもの〳〵しくひそめるが癖の聲をやゝ慄はして

「到底駄目ですばい」

と額に手をあてる。

「むゝどうもな……」

勇吉はそれきり何も言はなかつた。堪らなく頼りなくなつて、お末はさつと眼が痛くなるのを覺えた。

娘は死んだ、死んだとは思へぬけれども死んだのだ、といつては、諦めかねて泣く、その時の悲しさはさぞと思ふと、想像するその悲しみ歎きが今胸に迫つて、つひ涙が溢れた。

勇吉は娘が萬一のことに思ひ至るにつけ、二年前に強いことを言ひ合つて家を出た悴のことを思つた。

その時二十二だつた若者は、三つ年上の女房をつれて、假令女郎あがりだからといつて家の爲めになるものは、爲めになる、誰が何といはうと氣に入つた女は飽く迄も氣に入つた、と未練なく家を出て、今は山形地方に流れて藥の行商をやつて居ると聞いた。それらが重い現在の心配に絡つて、身も世もなく、たゞ娘可憐さの思ひだけが明かに意識された。

九月半ばの町の祭典が、猖獗を極めた赤痢のために無期延期になつて、折角の若者の氣込みが徒になる。學校は授業が半日になる。役場からはそれに就て訓示の刷物が配られる。水泳ぎは禁じられる。白い巡査が時々茶屋〳〵を廻つて歩いて、魚の煮付けに群集がる蠅を金網で防がせ、三文店の大皿に曝されて居る水瓜の切り口に八ヶ間敷紙を張らせた。

それでも猶日毎に繩張りの家が殖えて、石灰の罐を擔いだ人夫の先に、昇汞水の壜を下げた巡査の姿が、西に行つたり東に行つたり、またかと道行く人に無氣味な思をさせた。人は惚々として、息をひそめた町にその日を送つた。

お末は好きな道とて、今年も私得仕事に半枚ばかりの秋蠶を掃いた。六疊の疊を剝がして、棚を吊つて、桑は僅かばかり持つて居る畑に、朝と晩と自分から摘みに出かけた。

或る日もさうして歸つて見ると、今年からお針の師匠へ通はして置くお大が、加減が惡るいといつて蒲團をかぶつて寢て居た。額に手をやつて見ると吃驚するほど熱く、その日の午后から幾遍となしに後架に起つて、その度に錐で腹を快られるやうに痛いといつて顏をしかめた。夜中にはお末を起して泣いて居た。

もしやと思ふものから、夫婦は青い顏をして額を集めたけれども、つひ脊中合せ程に門を搆へて居る頼みつけの醫者すら呼びにやらなかつた。それは飽く迄もお末が首を振つて强情を張つたからである。小さな躰を年中さもないことにばかり苦勞して居るお末は、口にするのも身慄ひするほど避病院といふものを嫌つた。それといふのも、そんなでもない者にまで下劑をかけて殊更に衰弱させて、碌々食事もあてがはず、遂には命をとつてしまふところだと、去年擬似赤痢にかゝつて避病院に入れられて、萬一を助かつて歸つた、無教育な長家ものゝ言ふことを堅く信じて居るからである。折角十六になつた大切な娘を、たとひかうして死んでも殺しにはやらぬと、涙まで溢して强情を張つた。勇吉とても同じこと、避病院に對してはそんなくだらぬ考へは持つて居なかつたけれども、可愛い娘をみす〳〵手放して情も容赦もない警吏の手に渡すのにはしのびなかつた。

第一勇吉は店を恐れた。五日なり一週間なりの交通遮斷、見得に關はず振撒かれた石灰の白い痕跡が及ぼす影況、そんなことを考へては、氣遣はれぬでもなかつたが、お末の言ふに從つて醫者を避けた。

越中富山の行商人が、年々無理押しつけに置いてゆく黃色い袋を取り出して、赤玉やら熊の膽やらそんなものを溫湯で飲ませて置いた。狹い家のことゝて、見通しに蒲團の見えるのを氣遣つて、草箒や莚などのがさつに押し込められてある二階を少し片づけて、座敷の疊を四枚ばかり据ゑて病人をそこに運んだ。寢てる人があるなどゝは決して人に云ふなと、かたく小僧の口をとめて、夫婦は一心になつて

神信心をした。

けれども病人は日增しに惡るくなつて來た。肉も下るかと思ふほど痛んでは便を催して、うと〳〵したかと思ふと辻褄のあはぬ言を口走る。僅か三日目の今日はもう見違へるほど肉が落ちた。お末もごつくり目がくぼんだ。

蠶は三眠にかゝらうとして居た。廿枚ばかりに殖えたのを、お末は手一つにやつて居たが、もう蠶どころの騷ぎではないと、幾度かそれを捨てようと思つた。けれどもまた例になく虫の精がよく、待ち切つたやうに桑喰む音の高いのを聞いては、また未練が殘つて、斷然流してしまふ程の勇氣も出なかつた。

雨に渴へた埃の街に夜が來て、蒸し暑いながら仰げば今宵も天の川は高く流れて居る。

積み累ねた笊や笠、さがつて居る馬の手綱やら麻やら、せゝこましく品物の精一ぱいにひろげられた店は、軒並に比して洋燈が殊に暗かつた。その下に十二ばかりの子僧が、足を斜にして坐つて居る。首が時折前後に搖れて、軒近くわざと咳拂ひして通る若者もあつた。

主人の空鼻を啜る音に、錢の音がカチ〳〵交つて響いた。店を背にして小半疊ほどの澁紙を擴げて、勇吉は今日の賣り溜めを調べて居た。十一になつた妹娘のお幸は、その前に寢そべつてばた〳〵兩足を泳がせて鉛筆を嘗めては小聲に調子をとりながら、たど〳〵しく唱歌をうつして居る。

二階からは憚つたやうに灯の影が洩れて居る。お末は一頻り腹を揉んでやつて居た手をとめて團扇をとつた。……ふと猫の泣く聲が耳にはいる。何處かで猫が泣いて居る……と何時からか識のぐるりを迷つて居た感覺が、いつともなしに中點に這入つて來て、今はなんなくそれが氣にかゝる。暫く耳をすまして見た。みしり、と一つ二階に足音がした。

「玉でないか、お幸――」

梯子の入口にお末の小さな黑い影が立つた。それとお幸も今し方氣づいた念を猶確かめるやうに、起きかへつて耳をたてゝ居たが、默つてふいと裏へ出て行つた。

「開けてやれ、倉だから確に」

こともなげに重々しい口で勇吉は云つた。さうしてそんなことよりも何か更に重大なことを考へなければならぬやうな氣がして口を堅くした。

倉ではない、と聲の方角で判じながらも、猶念のためにお幸は倉の戸をあけてみた。暫く闇に目を据えてみる。常ならば白い塊りがつと飛び出して一目散に驅け出して、戸口で待ち合して足に搦みつくのが例である。容子が少し變だと思ふ。なき聲が確に常と違ふ。

杜絕えたかと思ふと一頻り烈しくなき出して、憐れみを乞ふやうな、救ひを求めるやうな、それが續いては努力に焦慮る醜い聲となつて、たとひ可愛い我猫でなかつたにしろ、お幸の單純な心は動かされずには居なかつた。常から怖ろしがつて居る井戸端の暗さも忘れて、其處此處と歩いてはチョッ〳〵と呼んで見た。

建てつけの惡るい隣家の水口があいて話し聲が洩れる。

「何處の猫だ――」
「やかましい畜生だなァ、裏の倉に閉めこまれたんでねえか」
「啓介、鍵を持つて來て見ろ、倉……とも少し違ふやうだげつとな」
「隣りの玉かも知れないよ」
境の溝を越してお幸はそれに近づいた。
「お幸ちやんかい？」
小母さんの聲がして、三つの黑い顏が一樣に此方を透して見た。
「あんた家の猫でねえかい――」
「えゝ、さうかも知れないの」
「どうも此方らしい……」
提灯を持つた一人は、ふらり〳〵と聲の方へと翳して行つた。
「井戸だな――」
呟いてすた〳〵井戸端に寄つた。井桁に手をかけて丸い灯を中に下す。
「居た〳〵、おい居たぞ！」
「居た？」
急いで皆集まつた。

「やあ畜生なんだつて落つこちやがつたんだ」
「成る程ぎやあ〳〵なく筈だァ畜生一生懸命だもんな、緣に獅嚙みついてるんだぜ必と」
「おや〳〵まァ可哀さうに――」
朦朧とした丸い灯は、底深な井戸の中に搖られて、遙かに黑い水の動くところ、岸にあたつてほの白い物體が見える。
「玉だ！玉だ〳〵」
確めて今更お幸の胸は動悸を打つ。
「あげて、啓さん早くあげとくれ！」
「あげてつて、どうしたらよかつぺなこいつあ、此釣瓶にかゝんねかなァ――」
「啓さん笊はどうだい？笊を細引でつるしてさ」
人聲が耳にはいつた故か、猫は一際强く鳴き出した。
「待つてろ、今あげてくれつから――そうら畜生いゝか」
笊は細引でつるされてさがつて行つた。
「なんだ〳〵、駄目かなァ、駄目だいこらァ、畜生乘つかるつつう智惠がねえからな」
「困つたね――」
「己家の玉ですけえ」

お末も襷がけのまゝ寄つて來た。

「おつ母さ、見なんしよあれ玉が、玉があれあんなに……」

お幸はお末の袂をぎつしり握つて引き寄せる。

「どうした途端で落つこちたもんだか……　よいお晩なんて蒸し暑い晩ですことねえ」

「よいお晩でござりやす。とんだお騷がせ申しやすねえ……まあなんだつて馬鹿な猫だこと」

「可哀いさうに、おつ母さ」

お幸はひとりでは〻〻して居る。鳴き聲もだん〻〻弱つて來たやうな氣がする。

「水は飲んでないやうですげつともね――」

多くの首は更に井戸を覗き込む。

「仕方がない、丑さても頼んで來て中にはいつて貰ひやすべ。啓さんあんた……四郎さんでもいゝ、直ぐ其處の丑さ家へ行つて頼んで來てくれないかい……ね、御苦勞樣でも」

晩酌をひつかけて居た仕事師の丑さんが、やう〻〻のことでやつて來た頃は、もうすつかり聲が絶えて居た。丑さんは苦もなく釣瓶に傳はつて、がら〻〻と下りて行つた。

「……大丈夫だ〻〻、水はちつとも呑みやしねえ、石の間に首をつッこんでやがる。よしか、おいそら！あげやすよ」

「あつと、あ！よし〻〻」

細引は手繰られた。

「どれ〻〻」

一頻りまた爭つて筧の中を覗き込む。

「死んでるな！」

「いやまだ生きてる、腰ばかり濡れてらア」

お幸は矢庭にぐたりとしてゐる小猫を袂に包んで家へ驅け込んだ。

「おつ母さ、おつ母さ」

後に殘つて隣へ挨拶をして居るお末を待ち兼ねて、お幸は板の間に立つてうろ〻〻して居た。

「どうして死んでるか……　お湯でゞもあつためて見つか……どれ」

「たアま、たま〻〻」

「可哀いさうに……」

二人は臺所の暗がりでバケツや鐵瓶の蓋の音をたてゝ猫の介抱をした。

「お末！何してるんだ、早く來ないか」

二階から勇吉が呼ぶ。それには猫どころの騷ぎではないぞ、といふ氣が充分に讀まれた。

「はい」

お末もそれは承知しきつて居る、けれども先刻ふと、娘の病氣のことゝ、猫のふとした災難を繋ぎ合し

て考へてから、どうしても其聯絡を斷つて考へることは出來なかつた。其間に何等かの暗示があつて、猫が死ねば娘も死ぬ、といふやうな、いやな〳〵考へが、拂つても〳〵力强く胸を占めた。で小半時間かゝつてさま〳〵に手をつくした結果、やう〳〵枯れた聲をたてゝ鳴き出したのを聞いた時は、お幸にも增して喜んで胸をさすつた。

猫は屑綿で包まれて、お幸の膝に時々四肢をぴく〳〵させて居る。呼吸はまだ荒く細く不規則である。

程過ぎて二階からみし〳〵降りて來た勇吉は、提灯をつけて默つて裏へ出て行つた。

「お幸、お幸」

お幸は何故かびくりとした。そつと膝の上のものを下して、下駄をつッかけて恐る〳〵出て行つた。

「なアに？」

遠くから聲をかけて、足さぐりに近づくと、勇吉は倉の脇にすつきりと立つて居た。

「これを持つて居な」

と提灯を手に渡す。左の手に鍬を下げて居る

「何しんの？」

けれども勇吉は默つて居た。力を入れて一下し鍬を下すと、カチリと石に觸れて齒の浮きるやうな音をたてる。瓦の缺片や瀨戸物の缺片が、堀りかへされて割られて、二つに切られた蚯蚓が、身に波を打たして這ひ廻つた。」

殆ど六七寸堀り下げた。

野中に金を埋めたといふ、昔話の泥棒のことを思ひ出して、地を堀るといふことが、お幸には少からず恐ろしく思はれた。聞くのも恐ろしいやうな氣がして、不安な眼を凝乎と凝らして居ると、勇吉はやがて足許に置いたお大が便器のものを、その穴にあけた。お幸にはそれを何の譯とも解することが出來なかつた。

傳染の恐怖、生命の危憂、隱蔽の不安、勇吉は矢鱈にビール壜の石炭酸水をふり撒いて、急いで土をもとにかへした。

「貴夫、貴夫ー」

突然氣魂しくお末の呼ぶ聲、父子ははつとして起ちあがつた。（をはり）